

タイトル：2013 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2013年11月23日（土）10:00～13:20

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District (Downtown Beirut)

## What Kind of Role Does GCC Play for Regional Security? : The Significance of the Peninsula Shield Force Deployment to Bahrain and the Possibility of Cooperative Security

村上 拓哉（桜美林大学大学院 国際学研究科）

本報告では、2011年にバハレーンで発生した騒乱を鎮圧するため湾岸協力会議（GCC）の合同軍がバハレーンに派遣されたことを事例として、国際関係論の文脈から安全保障機構としてのGCCの役割を明らかにしようとした。過去の研究では、GCCは湾岸地域の安全保障構造の中で集団的な自衛機能を確立することに失敗し、各国は米国と二国間安全保障協定を結ぶことでイラクやイランに対抗してきた面が強調されてきた。しかし、GCCの安全保障機能は外部脅威よりも内部脅威に対処する形で発展してきており、地域のなかで協調的安全保障機構として機能してきたといえる。

2011年のバハレーンでの騒乱は、内部脅威に対するGCCの安全保障機能が如実に発揮された事例であった。GCC諸国と米国との同盟は機能せず、GCCは独自に合同軍を派遣し、メンバー国での体制転換を防ぐ意思を内外に示した。バハレーンに展開されたGCC合同軍は規模も小さく、任務も騒乱の中心地とは離れていたことから、バハレーン国内の情勢に与えた軍事的な影響は限定的だったが、今回の派遣はGCC結成以来初となる独自のミッションであったこと、GCC諸国は国内安全保障の問題に軍事的手段を使用することを厭わない意思を示したという点で画期的であった。GCC諸国が一致した対応をとれたのは、バハレーンの騒乱が自国の反体制運動にも波及することを恐れたためである。最後に、各国の思惑が大きく異なる対外的な脅威に対しては脅威認識を一致させることは難しいものの、GCCは対内的な脅威に対する地域的な協調的安全保障機構として今後も機能していく可能性が高いことを指摘した。

本報告に対してはAmerican University of BeirutのHilal Khashan教授にコメンテーターを務めていただいた。Khashan教授からは、（1）論文の問いとしてなぜGCCが内部脅威に対して同盟を築くことに成功したかを見ているが、なぜ外部脅威に対して同盟を築けなかったかを見るべきではないか、（2）サウジアラビアの外交政策を形成する国内事情により着目するべきではないか等、建設的かつ重要な指摘をいただいた。（1）に対しては、後者のテーマは別稿で検討する予定であると述べおいた。（2）に対しては、サウジアラビア一国ではなくGCC全体の動向を見ることが目的であったものの、結果として各国の思惑や利害関係を論文上に適切に反映できなかったのは反省点であると回答した。

全体を通じて、今回のバイルート訪問が非常に有意義であったことは論を待たない。報告会では会場からも複数質問が寄せられ、研究について再考する多くのアイデアをいただいた。また、

Khashan 教授からは投稿に向けて努力するよう励ましの言葉をいただいた。英語での研究報告、そして海外での発表は初めてのことであり、関係諸氏にはご迷惑・ご心配をかけてしまったと思うが、主催者である東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の方々のご支援のおかげで、無事に報告を終えることができた。心より感謝申し上げます。